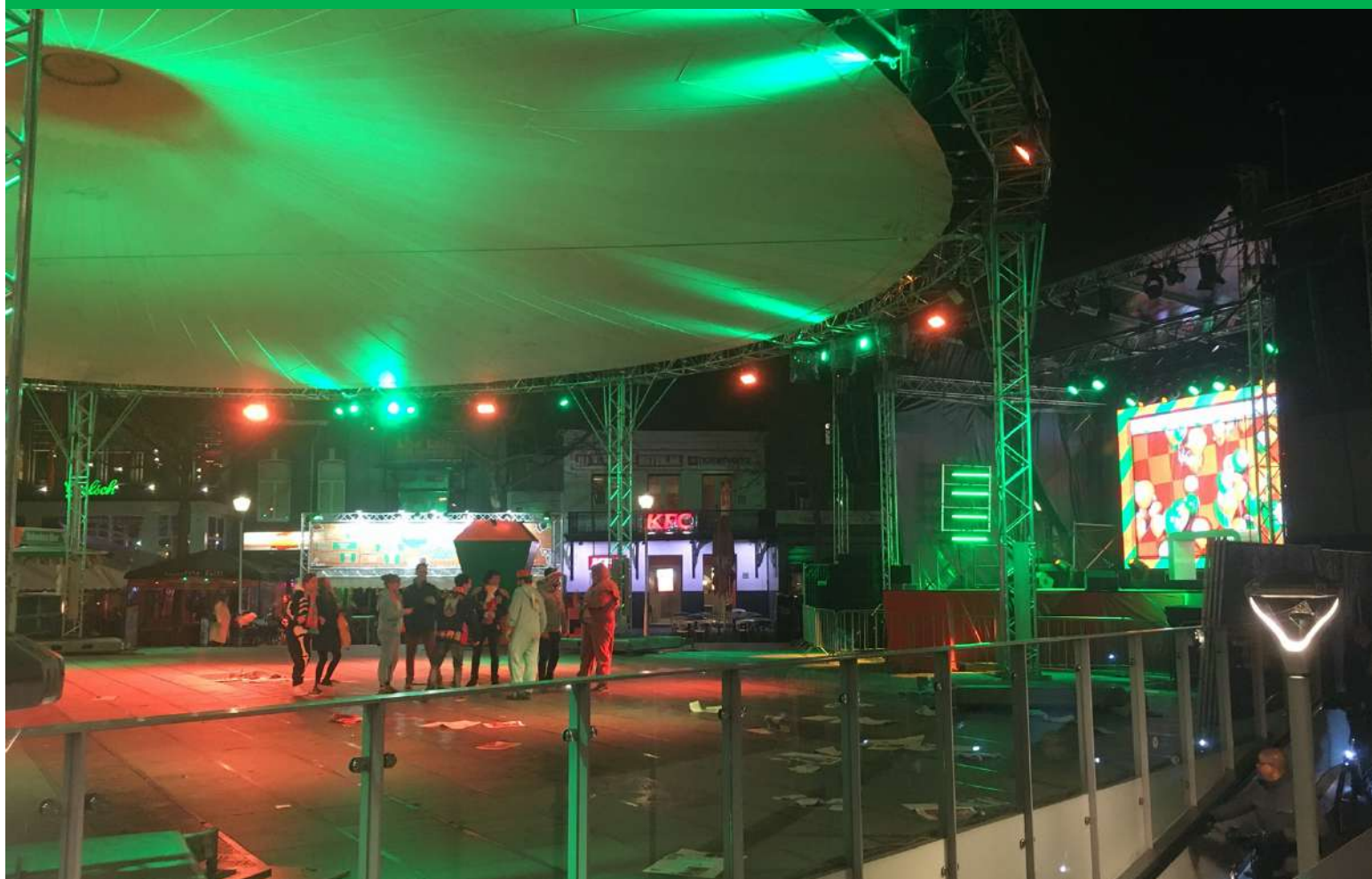


“2月といったらカーニバル！” オランダの南部では老若男女が仮装をして街中が昼も晩もお祭りムード。
ティルブルグは、いたるところがカーニバルカラーの緑とオレンジの一色（二色？）に！（山地）



みんなでつくる
イエナプランの輪
De kring 《デ・クリング》

一般社団法人日本イエナプラン教育協会

オランダ支部 会報誌

vol.7 2020年3月号

オランダ留学生の教育現場レポート

(吉田 由里香)

1. 自己紹介

はじめまして、昨年末より日本イエナプラン協会オランダ支部メンバーとして活動させて頂いております、吉田と申します。日本に住んでいた時は看護師・保健師として働いていましたが、海外で教育の勉強をしたいという長年の夢を叶えるべく、昨年9月よりオランダの NHL Stenden University のインターナショナルスクール教員を養成するコースに入学し、2度目の大学生活を送っています。ちなみに、オランダに来る以前は夫の仕事の都合で中東にも1年半程住んでおり、ご縁があって現地のインターナショナルスクールのアシスタントとして1年弱働いていました。



2. 現在行っている大学について

現在私が学んでいる ITEps (International Teacher Education for primary school) は4年制のコースですが、かなり実践重視のカリキュラムで、入学して3ヶ月目の11月に1回目、5ヶ月目の今年1月に2回目の教育実習がありました。それぞれ3週間がつつり現場に入り、2回目には最低週4回は実際にレッスンを担当するという、入学ほやほやの1年生としてはなかなか厳しい内容です。私はまだ以前実際にアシスタントとして働いていた経験もあり、社会人経験もある程度積んでいたのですが、高校を卒業したばかりの18歳のクラスメイト達にとっては、結構な試練だったのではないかと思います。実際、数十人単位の同級生達が、実習前後に学校を辞めてしまいました。

私にとっても、英語での模擬授業やレポートなど試練は多かったです。同時に念願のオランダの学校を見ることが出来る機会であり、とても学びの多い6週間でした。実習先はインターナショナルスクールで、イエナプランスクールではありませんでしたが、やはり日本の学校とは違った部分、またイエナプランとも通じる部分が沢山あるように感じました。そこで、2回の実習を終えて計6週間こちらの小学校に潜入してみた感想と、そこで得た気づきを、あくまで一個人の感想としてですが、皆様にお伝えできたらと思います。

3. 教育実習先の学校でのエピソード

私が教育実習で行っていた学校は、オランダのアムステルダム近くの町 Hilversum という所にある、小さなインターナショナルスクールです。Kindergarten から High School までありましたが、とくに小学校は各学年あたりの生徒数 10-20 人と本当に小規模でした。インターナショナルスクールは、オランダに限らず本当に様々なカリキュラムがありますが、この学校は学校全体として IB (International Baccalaureate, 国際バカロレア) という代表的なプログラムの 1 つを採用しており、小学校ではその初等教育プログラムにあたる PYP (Primary Years Programme) を採用していました。

IB・PYP についての詳細は、文部科学省ホームページにある“PYP のつくり方:初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み” (International Baccalaureate Organization の原文を文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムが翻訳したもの) 等をご参照頂ければと思うのですが、そのカリキュラムの特徴の 1 つとして“ユニット (Unit Of Inquiry)”の時間があると思います。ユニットの時間は、日本の IB スクールでは「探究の単元」とも呼ばれているようですが、端的に言うと教科横断的探究の時間、とも言うべきでしょうか。イエナプランで言う所のワールドオリエンテーション、日本の総合的学習の時間にも似ているかもしれません。ただ、日本の総合的な学習の時間と比べると、それに割かれる時間が圧倒的に違います。私が行っていた学校 (小学 3 年生) の場合、午前中は 8 時半から 12 時半まで休憩を挟みつつ算数や英語、体育、アートの授業等がありましたが、午後 1 時から 2 時半までの 1 時間半は基本的に毎日、このユニットの時間に充てられていました。探究的な学習といっても、生徒が好きな事を各々やるという訳ではなく、6 週間ごとにテーマが決まっており、それについて様々なアプローチで学びを深めていきます。テーマについては、PYP カリキュラムにて提示されている 6 つの大きな基本テーマから、先生たちが発展させて決めていきます。

“PYP の教科の枠を超えたテーマ”

私たちは誰なのか

(Who we are.)

私たちはどのような場所と時代にいるのか

(Where we are in place and time.)

私たちはどのように自分を表現するのか

(How we express ourselves.)

世界はどのような仕組みになっているのか

(How the world works.)

私たちは自分たちをどう組織しているのか

(How we organize ourselves.)

この地球を共有するという事

(Sharing the planet.)



PYP のコアバリュー

(文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム「PYP のつくり方:初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み」(2016)より、英語部分については“How the PYP works”

<https://www.ibo.org/programmes/primary-years-programme/what-is-the-pyp/how-the-pyp-works/> より抜粋)

例えば、私が最初の実習に行った際には、「世界はどのような仕組みになっているのか」に関連して、“Earth, Space and the Universe”(地球と宇宙について) というテーマでユニットの時間が進められていました。具体的な学習の流れは学校や先生によっても異なってくるのだと思いますが、私のクラスの担任の先生は、まず生徒全員にテーマについて「既に知っていること」「疑問に思うこと、知りたいこと」を書き出してもらい、それを元にその後のアクティビティを組み立てていました。たとえば、「宇宙飛行士は、宇宙でどんなものを食べているの?」という疑問が子どもから出れば、実際に宇宙食を皆で試食してみて、その感想を発表し合ったり、なぜ宇宙食はフリーズドライになっているのか? フリーズドライでなければどんな事が起こるのか? そもそもフリーズドライって何? など、そこからさらに Inquiry (問い) を深めていく、というように進めていました。



皆で試食した宇宙食。左から、ぶどう、バナナ、アイスクリーム。

ユニットの時間には、学校の中だけでなく、学校の外の施設にも積極的に出かけていきました。私も、1 回目の実習の際にはアムステルダムにある“Space Expo”(宇宙関連ミュージアム) に一緒に行って、実際に使われていたロケットのパーツや宇宙服を見たり、ワークショップに参加したり、各惑星上で自分の体重は何 kg になるのかを一緒に測ってみたりと、様々な体験をしました。2 回目の実習の際のユニットのテーマは、“How we express ourselves.”(私たちはどのように自分を表現するのか) に関連して“Acting Out”(表現する、演じる) でしたが、この時も実際に劇場に行き、舞台の裏側を見たり、劇団員の方々からお話を伺ったり、実際に劇を作ってみたりと、“ホンモノに触れる、実際に体験してみる”ことをとても大切にしているなど感じました。この姿勢は、イエナプランにおける「真正性(オーセンティシティ)」にも通じる所があるのではないかと感じました。実際に、PYP のガイドラインの中にも、以下のような記載があります。

“PYP では、学習が最も効果的に成されるのは、学習内容が児童を取り巻く世界と本質的に結びついている場合であると信じており、学校から課せられるだけの不自然なものであってはならないと考えています。知識や技能の習得、物事の意味と理解の探究には、現実と関連性のある内容を通して行うのが最善の方法です。”(前出の文部科学省 HP より)



子どもたちがペアワークで作った宇宙についての展示物。タブレットや本で惑星の特徴を調べて、絵や文章にまとめてクラスに発表します。

これに関連して、学校における先生の役割も、日本における一般的な“先生”としての役割とは少し違っていると感じました。PYP では、先生含め学校スタッフは“児童が自らの学習を大切にし、自分の学習に責任をもつことに前向きに取り組めるよう、気を配りながらその過程の手助けをするファシリテーター”として位置づけられていますが、それを色濃く反映しているのが、私がお世話になったクラスの先生がよく言っていた「私は知識を教えるんじゃない、どうやって学ぶのかを教えている」という言葉だと思えます。先のユニットの例で言うと、先生はもちろん宇宙や演劇のことを子どもたちよりは知っているのかもしれませんが、それでもやっぱり元宇宙飛行士でも演劇のプロでもないので、それらの事について深い専門知識を持っている訳ではありません。でも、それは当たり前だと思うのです。先生だって人間で、神羅万象全ての事に通じている人なんて、まず居ないのだと思います。その代わりに、色々な所に行って、色々な人に会って、見て、体験して、聞いてみる。そうしてそれぞれが得た学びを持ち帰って、気になる事についてはさらに深掘りして、作文や絵、プロダクトを作って、皆と共有する。先生もよく、子どもたちの発表を聞いて「そうだったの！私もそれは知らなかった。皆に教えてくれてありがとう」と言っていました。このような先生の姿勢を通じて、大人だからと言って全ての事を知っている訳ではない事、だからこそ人は学び続ける事が大切なのだという事、そしてお互いから学び合う事の尊さを、子どもたちも感じとっているのではないかと思いました。

このような、ある種「自由な学び」が出来るのは、勿論先生1人の力ではなく、学校自体が、先生1人ひとりを信頼し、Space Expo に連れて行くと言えば2つ返事でOKしてくれるような体制になっているからこそだと思います。私は日本での教員経験が無いので日本の学校の事情はあまり分からないのですが、担任の先生に「このスクールトリップはいつ頃行くと決めたのですか」と伺うと「だいたい2週間前位かなあ」と言っていたので、2週間で学校からの承認を得て、保護者へも連絡してすぐに実行できてしまうというフレキシビリティに感動しました。

また、保護者の方の学校行事への参加も、日本に比べて積極的なように感じました。スクールトリップへの同行はもちろん、これまた偶然実習中にあった「ワールドフェア」という、各国の食べ物や文化を子どもたちに体験してもらうという行事でも、皆さんかなりノリノリでブースを出して参加されていました。特徴的だったのは、平日午前中にも関わらず、お父さんお母さんの参加がちょうど半々くらいだった事です。さらによくよく見てみると、各国の保護者の男女比が、ほぼそのまま各国での男女の育児参加率を反映しているかのように見えたのが、とても興味深かったです。具体的には、オランダ、アメリカ、北欧諸国などはお父さんのみか両方、アジア各国（中国、韓国、インドなど）はほぼ見事にお母さんのみといった具合でした。勿論これは偶然かもしれませんが、チーズを振る舞いながらオランダの文化について熱心に子どもたちに説明するお父さんを見ていて、少し羨ましい気持ちになった事は否めません。やはり、今は皆オランダという同じ国に住んでいても、それぞれ根底にある習慣や育児に対する考え方、そして会社側の理解（オランダで働いていても、オランダ企業とは限らない）等によって、家族のあり方は変わって来るのだなと感じました。

その他にも、マインドフルネスの授業と Strong Classroom というクラスをより安全・安心な場所にするための話し合いの時間がそれぞれ週1回ある事、先生たちも週5日勤務だけでなく週1日から半日単位で自由に働き方が選べる事など、日本の学校には無かった特徴を沢山見つける事が出来ました。最後に、本当にこの学校が素敵な学校だなと感じたエピソードをご紹介します、今回の報告の締めくくりとさせて頂きたいと思います。

上述のとある「Strong Classroom」の時間、その日のテーマは「学校に対する不満」でした。生徒たちに、なんでも学校に対してもっとこうして欲しいという事を書くように、と先生が言うと、子どもたちは少し困った様子で、「不満なんて無いよ」と言い始めました。先生が「それじゃ、例えば、もっと休みが欲しいとか？」と水を向けると、子どもたちは「えー、休みが増えたら困るよ、学校に来れなくなっちゃうもん！」「そうだ、もっと学校の時間を伸ばしてくださいと書こう」と、口々に言い始めたのです。それを聞いて、こんな学校で学ぶことのできる子どもたちは幸せだな、と心から感じました。私はまだまだ教育の勉強を始めたばかりの未熟者ですが、いつか日本中の子どもたちが安心して「もっともっと学校に行きたい！」と言えるような学校と社会を作れるよう、より一層学びを深めていこうと、心に誓ったのでした。



ママさん哲学者
マコの
哲学的オランダライフエッセイ

～ その6 ～

優しいって、どんなこと？

(武田 昌子)

とある午後、近所の図書館で勉強をしていた時のこと。その2階にある大きな窓からふと外を見下ろすと、広場の真ん中で泣きじゃくる幼い女の子と、それをなだめているお父さんの姿が目に入った。どんな悲しいことがあったのか、それとも、何かに怒っているのだろうか？背の高いお父さんは、地面に膝をついて、とにかく興奮しているその子を守るように抱きしめていた。その様子を見ていたら、ふと、数年前の自分と息子にも同じような場面があったなあ、と思い出した。

それは、息子がまだ5歳だった頃のこと。下校時間になったので、いつものように息子を迎えに学校へ行った。すると、先生に連れられて他の生徒達と一緒に校舎の外に出てきた長男が、何か訴えたいことがあるように、一目散に私の元へ駆け寄ってきた。そして、私にしがみつくと、私を見上げながら、彼は堰を切ったようにこう話してくれた。

“ママ、今日ね、先生が「〇〇君がクラスで一番優しい子です」って言ったんだよ。でもね、僕は自分だって優しいと思うんだよ。クラスの子にあれもこれもしてあげたよ。いじめっ子から守ってあげたよ。〇〇君は、そういうことしないよ。僕のしてることは、優しいんじゃないの？！”

そう言って、校庭で人目をはばからずに泣きじゃくる彼を抱きしめながら、いろんな感情が私の中で渦巻いていた。担任の先生が独断で「クラスで一番優しい子」というのを決めて宣言したことが、幼いこの子をこんなにも傷つけている事に対する悲しみと怒りももちろんあった。でも、それに反して、先生の言うことに同意してしまう自分も認めざるを得ない。だって、先生が名前を挙げたその子は、本当に誰もが認めざるを得ない、正真正銘のいい子だったのですから！！その彼は、5歳と言う年齢ながら、いつもニコニコしていて、始終穏やかで、誰とも諍いを起こすことなく、先生や親に口答えをするなんてただの一度も聞いたことがありません。そんなブツダのごとき彼と、織田信長よろしくあちこちであまり好ましくない伝説を作り上げるうちの息子とをつい比べてしまい、「ああ、うちの子があの子みたいだったら、私の人生どれだけ楽だっただろう・・・」と、密かに彼のご両親を羨んでいたくらいだ。なので、母親の私ですら、先生のことを責められたわけではないのだ。

この一件は、私に「優しさとは何か」について考えるいいきっかけを与えてくれた。「優しさ」というのには、大きく分けて2種類あるのだろう。「積極的な優しさ」と、「消極的な優しさ」。そして、うちの息子が自分なりに「優しい」と考えて、実践していたことは、おそらく「積極的な優しさ」の方に分類されるものがほとんどだろう。周りの人に積極的に何かをしてあげる、誰かがピンチの時に自ら立ち上がって守ってあげる。そう言ったことを、彼は彼なりに自分の優しさの表現として行っていたのだろう。けれど、そこはまだ幼い子どものこと、うまく空気を読みなくて場違いなことをしてしまって、逆に迷惑をかけてしまうことが多いのだろう。そういえば、「他人のケンカによく口を出すので、やめさせてください」と、学校の先生からしょっちゅう注意されていたが、それは、稚拙ながらも「お友達を助きたい」と言う一心からだったのだろう。そして私は、そんな彼に「君子、危うきに近寄らず」と言う言葉を教えて、他人のケンカの仲裁に入ったりしないように、と散々お説教をしていた。彼が健気にも「優しい人」でありたい、と思い、自分なりに頑張っていたのだということを知らずに、彼の「優しさ」と、賢く立ち回ることができない彼の不器用さを理解できず、彼を矯正することばかり考えていたダメ母です・・・反省。



ちょうど5歳当時の写真。小さい頃からナイツなどに衣装するのが大好きでした。

それとは反対に、「消極的な優しさ」とは、自分から進んで何かをするわけではないけれど、とにかく周りに迷惑をかけない、揉め事を起こさない、他人に嫌な思いをさせない行動をとることではないだろうか。そして、学校や組織など、団体行動が必要な場面では、これはとても大事だし、特に学校という空間ではこれが非常に重宝されるだろうことは容易に理解できる。だって、クラスの子どもがみんなこうだったら、学校の先生の仕事がどれだけ楽になることか。事実、母親の私ですら、自分の子どもがそうなことを望んでいくらいだ。と言った具合に、子どもと関わる立場の人間は、どうしても「消極的な優しさ」の方に重きを置いてしまいがちなのではないだろうか。それが、今回の担任の先生の「あなたがクラスで一番優しい子」発言に表れているように思えてならない。

学校の校庭で泣きじゃくる彼に、私は、どんな言葉をかけていいかもわからず、ただひたすら校庭に座り込んで彼を抱きしめていた。30分も経った頃、泣きたいだけ泣いてすっきりしたのか、彼はようやく落ち着いて立ち上がった。息子に少し悲しい思いをさせたこの一件で、私はまた一つ息子について知ることができた。彼が自分なりに「優しく」なろうとしていること、でも、それが空回りしてしまっていること。そんなことに、ようやく気づくことができた。そして、例えそれが学校という場ではあまり評価されないとしても、せめて母親の私くらいは、そんな彼の「優しさ」を認めて分かってあげよう、と心に決めた。とはいえ、「積極的な優しさ」だけではなく、「消極的な優しさ」も、もちろん社会に必要な素晴らしい資質だ。だから、今の彼にはまだ難しいとしても、これも少しずつ、年齢とともに身につけていこう。そして、彼が将来、両方の優しさを兼ね備えた素敵な男性になってくれたら、私もダメ母の汚名を少しは返上できるのかもしれない。



今は、「もっと強くなりたい!」と、毎週の空手の稽古を頑張っています。

ところで…

〈会報誌 De kring タイトルの由来〉

De はオランダ語の冠詞、
kring は輪（サークル）の意味です。
イエナプランの大切にしている活動の1つ、
‘サークル対話’に由来しています。

とあるスーパーではこの時期に大きな紙張り子が飾られている。ただ、やや強面にちょっと引いてしまう…



オランダ教育ニュース

(翻訳：山地 芽衣)

1月30日(木) 4時25分

※本文中()は翻訳者によるものです。

教員ストライキ：参加意欲 高まるも 給与当てられない場合も

NOS (オランダ放送協会) が 3300 校以上の小・中高等学校に対して行ったアンケート調査によると、調査対象となった学校の 90%において教員のストライキ参加が決まっていると回答した。これにより、教員達のストライキへの参加意欲が高いことが明らかになった。

教員たちは今日と明日、構造的投資と労働負担の軽減を求めてストライキを起こす。デモ活動は全国各地で行われる。まさに、行進がフローニンゲン、ロッテルダム、ミデルブルグで予定されている。ロッテルダムのデ・カウプとティルブルグの国王ウィレム3世スタジアムでは大規模な集会が行われる。

ストライキ開催期間中の教員への給与支払いについては、当調査の4分の3が回答した。おおよそ45%の学校は、ストライキに参加した際、該当の教員はその期間に対する給与は支払われないとのことだった。学校経営者は教員のその分の給与を差し引くのである。

半分以上の調査対象校においては、ストライキに参加しても給与は通常通り支払われる。また、この2つの支払い状況の間も存在する。内数十校は、1日分の給与であれば支払われるということだ。

“支援はどこに？”

つまり、ストライキ参加期間の給与が支払われる教員は全員ではないということなのである。調査対象のうちこれに該当する教員は、この選択に落胆し、雇用者からの支えを受けていないと感じているのだ。“支援はどこにあるのでしょうか？私たちは自分たちのためにではなく、教育全体をふさわしい形で実現するために、ストを起こしているのです。”と、とある教員は話した。

CNV (キリスト教系オランダ労働組合) 教育の会長であるヤン・デ・フリース氏は、学校経営者がこの決断をしたことを残念に思っている。“こういったことによってすでに教員、校長、そしてクラスアシスタントが、あまり支えられていないと感じ、その事実が彼らの気に障っていると、私たちは気づいたのです。”彼は、その学校経営者たちが自身の決断を再検討することを願っているのだ。

デ・フリース氏は、学校経営者が急遽躊躇したり、あるいは支払わないと決めたりしたら、教員たちはすぐにはストライキを起こさないと見ている。“教育界のほとんどの人たちは協力的に働くことに慣れていて、経営陣とはなんでも話し合っています。そこでの決定がチーム内での協議に持ち込まれます。”

起こるべきタイミングではない

支払いをしていない学校経営者の内の1つが学校法人フルヴィウムだ。理事長のイエールン・グース氏はストライカーたちの目的を理解しているが、ストライキを起こすには適した時期ではまさにはないと考えている。“労働協約が締結されたばかりで、政府が予算を教育にさらに当てるといことはしないかもしれないことを、私たちは知っています。実際のところ、望む効果がこの先現れないということは、もうすでにわかっていますよね。”

それゆえ、彼は自身の経営する学校のストライキに参加する教員に対して、期間中に対する給与は支払わないと決めた。“反応の大きな部分は十分理解できるものでしたが、中には理解できない学校も数校ありました。そのために今も協議中なのです。”とグース氏は言う。スト参加教員の給与から差し引かれる分は、教育現場への投資に当てられると学校法人フルヴィウムは話した。

CNV（キリスト教系全国労働組合）のヤン・デ・フリース氏は、一方で、いいタイミングでのストライキ開催であったと考えている。“今日は教育関係者たちがよりよい労働協約のためではなく、長期間的なよき解決のためにストライキを行なっています。私たちは、今日や明日のためにではなく、未来のよりよい教育のためにストを起こすのです。”

スト期間中も給与が支払われる学校では、“経営陣が教員をサポートしているなんて最高”“経営者がついに後ろ盾となってくれる”との反応があった。数多くの学校ではこのストライキ期間が、教員不足に対するクリエイティブな解決を学校経営者と一緒に模索する機会として捉えられている。



ストライキ集会の看板。“すべての子どもはよい教育を受ける権利を持っている”

‘もう、給与についてではない’

昨年末に教育への新たな労働協約が定められた。そこでは教育職員に対して4.5%の賃上げが約束された。

そのため、数多くの調査対象である職員は、このストライキはもう給与アップのためのものではないと口々に語った。教員の労働の負担軽減、少人数クラス、事務作業の軽減などを抱える教員不足問題のために、彼らは構造的な解決を申し立てている。“毎度給与については取り上げられてきましたが、私たちのチームにとってこれは本当に、一番重要でないことなのです。”と、1つの学校は話した。

原記事：website ‘NOS Jeugdjournaal’ より ‘Kinderen geschrokken na fouten in uitslag eindtoets’

<https://nos.nl/artikel/2320866-leraren-staken-actiebereidheid-hoog-al-krijgt-niet-iedereen-doorbetaald.html>

発行元：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

編集：一般社団法人日本イエナプラン教育協会 オランダ支部

E-mail：oranda@japanjenaplan.org

※学校視察や移住についてのお問い合わせには対応していません。